

あ と が き

JJ 統合に関連して、基礎基盤研究のあり方が問われている。独立行政法人になったら、目的を明確にした研究（対象を明確にした何々のための核データの研究等）、かつ期限付きの研究しか認められないとのこと。一方、基礎研究に求められているのは、現状進行している各種プロジェクトに対して **Alternate** を出す能力、こんな別の方法がありますよといった事が提案できる能力であるとも言われている。極めて矛盾した事が求められているのだが、後者が世界にたいする我々の研究使命であるとしたら、基礎研究はもっと大きくくりの長期的な観点で実施しないとうまくいかないのではなかろうか。変化の激しいこの時期に、何を悠長な！と思われるかもしれないが、急がばまわれでもある。砂上の楼閣にならないように基礎基盤は手堅く固めていく必要がある。

核データのような基礎データ開発は、時間と能力を使いデータ評価を行うと共に、常に実験データの動向（そのデータに問題がなければ誰も測りはしないのだし、断面積データの真値は理論計算からは得られないのだから）を監視し、それをデータファイルに反映していくと同時に、利用者からのリクエストにきめ細かく応じていく必要がある。世の中、変わらなければやっていけないのも事実であり、不思議の国のアリスにでてくる赤の女王の様に踊りつづけなければならないのも事実である。そのためには、核データで言えば、世界から感謝されるファイルを出し続けること、世界を引っ張っていくことが生き残りの処方箋だと考えている。そのためには、まずユーザーの声を聞けと言いたい。全てがそこには集約されているのだから。核データは測定データに始まり測定データに終わると思っている。計算はまだそこまでの能力はない。いまや、問題解決のためには1%の精度でのデータ取得が大真面目で議論されている。そういう段階に入っている。

本来、原研の仕事は、国の仕事として民間の出来ないところを補完するという意味合いがあったはずであり、民間に出来ない、国としてやるべきところを、国に代わってやるというスタンスであったと思っているし、現在でもそうあるべきだと思っている。いまや、かつて脚光を浴びた家電・重電メーカー各社の中央研究所もほぼ壊滅的状况にあり、どこも極めて短期的な2~3年先しか見られないような状況になっている。そのような中で、原研も同じ道を歩もうとしているように見える。危惧すべきである。予算を自分で都合するように言われた研究機関の運命は、もうかなり明白である。英国の名門の原子力研究機関であった **Harwell** も、いまや壊滅的状况にある。何かのときに、逆転することの出来る能力を期待されても、疲弊してしまっただけは何の意味もない。こういう時期だからこそ、流されることなく、各人が自分を持って研究に邁進して欲しい。結果はおのずからついてくると信じている。

最後に、私事になるが、この 8 月 1 日付けで、7 年近くに及んだ、核データセンター室長を免じられ、部の方へ異動となった。この間、皆様には大変お世話になりました。改めて御礼申し上げます。後任は、片倉純一主任研究員が昇任した。激動が予想される JJ 統合を乗り切って新たな核データセンターを築いていただけるものと信じている。

(長谷川 明)

hasegawa@ndc.tokai.jaeri.go.jp

核データニュース編集委員会

中川 庸雄 (委員長、原研)、井頭 政之 (東工大)、岩本 修 (原研)、長谷川 明 (原研)、
山野直樹 (住友原工)、吉田 正 (武蔵工大)、[オブザーバ] 喜多尾憲助